

春燈

4 月号

April 2010



主宰の句

安立公彦

狐火や真間の継橋ゆらり越ゆ

春めくや夕月に添ふ星ひとつ

春めくやもの思ふにも空仰ぎ

子らの世に戦よあるな建国祭

茂吉忌や辛夷はいまだ花解かず



燈下集



○ (故) 中島和昭

大寒の朝刊を待ちぬたりけり
明石なる丁稚羊羹寒見舞
意気壮んなり短寸の土筆どち
わが土筆盗掘したる奴は誰
土筆野にカメラ持参の先客あり

○ 片桐てい女

初風や壁に魚拓の遠目癖
負独楽の心棒替へて出直さむ
接近の火星従へ寒満月
老いたるか冬支度の菜を余しけり
なほ生きて霜柱踏み氷柱打ち

○ 長谷川照子

寒茜雲を吸ひ込む空の隅
二羽揃ひ鴉が帰る寒茜
寒蜩砂出し切つて煮られけり
児に返すボールよく飛ぶ四温かな
一人居に慣るもさびしや春の宵

○ 鈴木榮子

晩き梨晩三吉は佳き名かな
虎の尾を踏むまじと来し賀状かな
日本橋河岸に倉並め千鳥かな
花の雨傘よせてをんな逃しけり
雪岱の袖珍本の夜の梅

○ 秋場貞枝

「両虎相闘」賀状版画に睨まれし

ラッコ衿の二重回しや父の忌来

柵田守り老いたる背ナや冬夕焼

臘梅の夜道を誘ふ香なりけり

御殿雛王朝絵巻展べにけり

○ 宮田豊子

気付き合ふ互ひの素顔ちやんちやんこ

捨てられぬ父の虫喰ひ冬帽子

事なきを祈る慣ひや初御空

探梅の日差し明るき方へかな

青き踏む子に蹴く風の柔らかき

○ 佐々木新

淑気かな見返り弥陀の立ち在す

満目の流水せめぎ海暮るる

朝あかね白鳥の息染めにけり

街の灯の滲む舗道や冬の雨

凍蝶や日中ひなかに越さむ峠道

○ 呂秀文

菓喰栄養過剰症候群

電氣化のキーに戸惑ふ冬籠

ミンク着てひとの視線にたぢろけり

やりとりを見て見ぬふりの懐手

解決の道なほ遠く枯野行く

○ 呉文宗

鷗尾高し爪立ちて待つ初明り

橙に片葉残して飾りけり

弾初の自動ピアノや手持無し

初夢に口割れど舌もつれたり

悴みて無調法の咎悪びれず

○ 陳妹蓉

賀状書く隔世遺伝の金釘流

幸呼ぶてふガンコ魚買ふ年用意

悪筆の傾き癖や古日記

泰然とあごでしやくりし懐手

井戸水のぬくもりやさし初仕事

○ 井上正子

水仙の毅然と伸びて雨に耐ふ

節分の潤目鱈を求めけり

故郷より届く友の訃花齋

なりゆきで纏めし婚やシクラメン

トランプの一人占ひ地虫出づ

○ 三代川玲子

寒海苔のかわくかそけき音なりけり

軒雪崩とほくに聴きし寢覚かな

金泥に目鼻うするる貝雛

古草や七堂伽藍ありし地の

春光を土に鋤き込む農夫かな

○ 豊谷青峰

屋根瓦の恵比須大黒日脚伸ぶ

バーコードの長き影踏み冬木立

底冷の伊賀の育てし芭蕉翁

藩校の畳の荒れし余寒かな

ニュース速報の電光板や冬深し

○ 高埜良子

初風や松並木より表富士

初不動目なし達磨の大き買ふ

笹鳴のそここの多摩郡かな

寒明を告ぐる母郷の瀬音かな

悲なく六十路過ぐ梅咲きにけり

○ 吉川隆

洗礼の稚の大泣春近し

冬の雨傘に小さく入りけり

同宿のよしみの御慶交はしけり

源氏名の点る門灯初天神

老夫婦互ひの鬼を遣らひけり

○ 久本久美子

北風吹いて干物の眼窪みけり

寒鯛の台車大事に押ししてゆく

掌に弾みて消ゆる霰かな

雪催早や灯を点すビルの窓

母の忌や頷いてゐる雪柳

○ 本田 保

寒紅や嘘と誠の使ひ分け

七種のすずなすずしろより知らず

弓始発止とばかり矢を放つ

冬の星またたきぬしが消えにけり

悴みて一步の足が踏み出せぬ

○ 瀬戸 峰子

まゆ玉の揺れて和と輪が睦み合ふ

まゆ玉や和氣藹々の枝揺るる

まゆ玉の明かりに句座の息通ふ

まゆ玉の枝垂れ華やぐ句座にあり

まゆ玉の設ひにある躍動感

○ 棗 怜子

女正月任せし厨気に懸り

改札に色あふれ出る成人式

煮凝は残りの福の昼餉かな

鬼やらひ八十路と思へぬ夫の声

癒えたしか水仙土を擡げけり

○ 北岸 邸子

淀川に上げ潮の香や初天神

初曆まつ先に書く母忌日

売土地の立札古りてなづな咲く

日のあたるそこ花なづな二、三輪

通院の裏の近道春の霜

○ 今井 弘雄

湯けむりの真直に立つ冬景色

スクラムの崩れしラグーの湯気残る

風硬し紬の里の雪晒

うぐひすや言葉覚えし子の会話

ひとり居の誰に甘ゆや春の風邪

○ 竹内 慶子

まゆ玉や晴着にぎはふ写真館

オペラ歌手とどめはロック寒の入

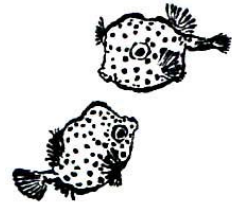
鱈ちりや四人の暮しあとすこし

羽衣のやうなる空や春近し

新人の背筋すつくと春隣

当月集

安立 公彦選



○ 片山博介

鹿介鼯鼠の祖父や寒の月

知恵の輪の抜けし一瞬冬の雷

腕欠けし聖母の像や冴返る

蘆の芽や船過ぎてより波の音

帰る鴨入日は湖に金を延べ

○ 宮崎紗伎

凍て土に風にあつまる地鎮祭

風呂に水張りて大寒ゆるびなし

神木のはるかな樹齡大雪解

寒夜かな母の眼鏡の銀のつる

縄跳びや臘梅に風華やくも

○ 府川昭子

さざ波の寄せ来るごとく日脚伸び

つくばひにあそぶ日の斑や笹子鳴く

雨上る土の匂ひや春隣

ふと母の現れさうな春の縁

夕空に声吸はれゆく春の鳶

○ 矢口笑子

よく泣いてよく笑ふ子や日脚伸び

二ヶ月の空を切り取る大鳥居

神門の雪解雫を潜りけり

黒々とお堀の水の余寒かな

春めくやうす紅の鳩の嘴

○ 清水美子

千年の恋を取り合ふ歌留多かな

みはるかす雪の甲斐駒龍太墓碑

待春の百戸の谿を訪ねけり

江戸の技蒼白穹に舞ふ梯子乗

風花や師の句碑に会ふさざえ堂

春燈の句

安立 公彦選



茶の咲いて農繼ぐ声の若きかな

埼玉 鈴木 撫足

雪しづる響き神さぶ宮居かな

雪もよひ今宵無口の人とゐて

大阪 小田 明美

立て掛けし茶屋の床几や梅探る

鳶舞ふや千の貝抱く春の湖

薄氷の映す雲踏む旅心

はうれん草の紅ほの甘き夕餉かな

シヤム湾や春の饒舌波頭

バンコク 大口 堂遊

旧正の淑気身近にタイ暮し

まどろみの野辺に春禽舞ひ降りぬ

東京 後藤真由美

西行も嘆き見しかや春の月

二合半を夫と酌む夜や雪しづる

春眠や永久の眠りへ小手調べ

深雪晴伸びしてこず糸水飛ばす

蒼空に描く友禅梅の花

広島 川崎 雅子

石組みに残る栄華や寒椿

寒行の念仏の声こはばれり

神奈川 小山 繁子

煮凝や夫と二人の夕灯

旋回は別れの儀式白鳥引く

春立つや雨に明けゆく瀬戸の島

寒灯の己が微動も灯すかな

地を行くはあねといもうと寒の月

東京 坂本依誌子

手いつばいの封書開くや春隣

瞬かぬ寒星父の星なりけり

千葉 木村みどり

若き客なだれ込むなり鬼やらひ

日脚伸ぶ口笛の曲母の歌

待春や浅黄の袖仕付け取る

春めくや庭に番の山鳩來

大釜を据えて味噌焚く仕度かな

大釜を据えて味噌焚く仕度かな

余言

安立公彦

粗鬆症の骨とてわが身齋打つ

上山 永晃

新年大会の句稿の中にこの句を見たとき、自ずと襟を正す思いだった。骨粗鬆症といういかにも発声しにくいこの病は、その言葉にも似た厄介なものと言われる。

作者はご承知の通り医師に身を置く人、国手である。そういう作者であれば、この「骨とてわが身」に一人の感慨が籠っていることを知る。

又、一句の内容から見る時、この句の新しさに瞠目する。「齋打つ」という伝統ある季語が、今日的な内容と結びあい、みごとに現代俳句となっている。

鳥海のかぶさる屋根の雪卸す

園部 露郷

作者の住いは秋田県湯沢市。西の方には名山と言われる鳥海山がそびえている。斎藤茂吉が「ここに浪の上なるみちのくの鳥海山はさやけき山ぞ」と詠んだ秀峰だ。

「雪一丈卸してつひの栖かな」という句の通り豪雪地帯なのであろう。一茶の「つひの栖」は「雪五尺」。湯沢の雪の深さが分る。冬場の鳥海山麓の雪は、まさに「鳥海のかぶさる屋根」の通りの降雪なのだろう。しかしこの句には、雪卸しの作業より、鳥海山の秀麗な山谷が感じられ、背景の空の青さが浮かんでくるような趣がある。

草城忌遺影の銅版秘蔵せり

富山 俊雄

「草城忌」は一月二十九日。日野草城は昭和四年、「ホトトギス」同人に推挙されたが、新興俳句運動に参画し、同人を除籍される。その折の主筆誌「旗艦」に、若き日の安住敦が入会し、第一句集『まづしき饗宴』を上木したことは周知の通りである。

日野草城は昭和二十四年「青玄」を創刊する。作者はその「青玄」に入会、草城の薫陶を受ける。数年後草城の死去に伴い、一時俳句を中断するが、その後「春燈」に入会する。草城は作者の俳人としての姿勢を見出した最初の師であると言えよう。そして終生の師と仰ぐ安住敦と草城はまた「旗艦」で結ばれていたという深い縁がある。

この句には作者の草城への思いが強く出ている。富山さんは今夏第四句集『山居抄』を出版される。

まゆ玉や脚註真砂女三百句

松橋 利雄

『脚註鈴木真砂女集』は、執筆者および、本部事務局のご協力により、昨年未めでたく出版された。真砂女の主だった句は殆ど採録してある。この句集は、春燈会員以外の人からの購入申込みも多かつたと聞く。

平成以降、俳人真砂女の読者は急速に増えてゆく。テレビの影響もある。しかしそれ以上に、作品の飾らない表現、常に前を向いて歩く姿勢、加えて一句の質の高さ、それらが相乗して、真砂女の読者を増やして行ったのだ。

作者も執筆者の一人。新年、改めてこの句集を手にしながら、脚註に見入る作者の姿が浮かんで来る。

知恵の輪の抜けし一瞬冬の雷

片山 博介

子供の頃知恵の輪で遊んだ人は多かるう。それを作者はいま懸命に解こうとしている。その知恵の輪が解けた瞬時冬の雷鳴が聞えたという。構成のきつちりした句だ。

作者はまた、〈萱の芽や船過ぎてより波の音〉という写生句も出している。双方ともに大切な俳句の形である。

夕空に声吸はれゆく春の鳶

府川 昭子

立春を過ぎると寒さの中にもどことなく明るさが感じら

れる。作者はそういう一日、海辺に出て空を仰いでいたのだろう。見ると鳶が輪を描いている。

いつか行った外房のホテルでは、朝、中庭で鳶に餌を撒いていた。餌を目当てに舞い降りる鳶の声は余りいい感じのものではない。作者の場合は、「夕空に声吸はれゆく」という表現から、舞う鳶の優美な姿が見えてくる。「春の鳶」にも、なんとなく早春の気配が漂う。

灯を消して夫水仙の香を言へり

廣瀬 克子

一読やすらかな気分になる句だ。

昼のうちに寝室の花びんに挿しておいた水仙が、灯を消したいま、静かに香ってくる。もう睡ったと思っていた夫が、ひと言花の香りを口にする。妻はその声を聞きながら平穩に過ぎた一日を感謝の思いでふり返る。

この句は私小説の世界である。わずか十七字の句が、私小説の域に及ぶところに、俳句の持つ強靱さを感じる。

老いの皺一つ増やして松過ぎぬ

前川千枝子

「顔の皺」でなく「老いの皺」である。また「年の暮」でなく「松過ぎぬ」である。

わが身の老齢化を詠んでいて一句は明るい。そこに自ずと滑稽味を生ずる。意図して作り上げた滑稽味でなく、一句に自ずと浮かぶ滑稽味こそ本ものの俳句である。